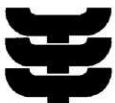


# 館林市内遺跡発掘調査報告書

## — 令和2年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

青柳城跡	(令2地点)
館林城跡・城下町	(令2地点)
若宮遺跡	(令2地点)
北近藤第二地点遺跡	(令2地点)
下新田遺跡	(令2地点)
大島地区試掘調査	(令2地点)

令和2年度(2020年)



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>

# 館林市内遺跡発掘調査報告書

— 令和2年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

青柳城跡	(令2地点)
館林城跡・城下町	(令2地点)
若宮遺跡	(令2地点)
北近藤第二地点遺跡	(令2地点)
下新田遺跡	(令2地点)
大島地区試掘調査	(令2地点)

2021  
館林市教育委員会



## 例 言

- 本書は、令和2年度に国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。令和2年度の調査地点名は「令2地点」とする。なお、大島地区において、試掘調査を実施したので、合わせてここに報告する。  
青柳城跡 館林城跡・城下町 若宮遺跡 北近藤第二地点遺跡 下新田遺跡
- 令和2年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課(文化財係)
教育長	小野 定
教育次長	青木 伸行
文化振興課長	戸叶 俊文
文化財係長	阿部 弥生
主任	田沼 美樹
主任	宮田 圭祐(担当)
主事	小林 松嗣
主事	橋本恵理佳
主事	小林 里穂
- 調査作業員・整理作業員(50音順敬称略)  
杉田 和実 須永 弘美 須永 欣伸 津布工りり子 寺嶋 美雪 西谷 義信  
原田 和沙 藤倉 功也 前田 清美 三橋 瑞江 八代 昌明
- 出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。
- 本書の編集・執筆は、宮田が中心となり行った。
- 遺物の実測・観察表およびその他の図版作成は、宮田・津布工・原田・前田・三橋で行った。
- 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)  
地権者各位 群馬県教育委員会事務局文化財保護課 館林土木事務所 館林市都市建設部都市計画課  
館林市政策企画部税務課 館林市農業委員会事務局

## 凡 例

- 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。「出土遺物写真」の縮尺は1/3を基本とした。
- 遺跡位置図等は、令和3年度発行の館林市都市計画基本図を用いた。
- 土層断面および出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

## 参 考 文 献

- 黒澤照弘 2009 「館林市における土器師皿の変遷—15~17世紀を中心にして—」『館林市史研究おはらき』第3号  
館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集~第58集  
館林市史編さん委員会 2010 『館林市史 特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡』  
館林市史編さん委員会 2011 『館林市史 資料編1 館林の遺跡と古代史』  
館林市史編さん委員会 2015 『館林市史 通史編1 館林の原始古代・中世』

# 目 次

例 言
凡 例
参考文献
目 次
挿図目次
表 目 次
写真図版目次

第1章 館林市の環境	
1. 地理的環境 .....	1
2. 歴史的環境 .....	1
第2章 確認調査の概要	
1. 青柳城跡(令2地点) .....	3
2. 館林城跡・城下町(令2地点) .....	7
3. 若宮遺跡(令2地点) .....	9
4. 北近藤第二地点遺跡(令2地点) .....	11
5. 下新田遺跡(令2地点) .....	13
第3章 試掘調査の概要	
大島地区(令2地点) .....	16
遺物一覧	
写真図版	
報告書抄録	

## 挿 図 表 目 次

第1図 館林市の位置 .....	1	第13図 調査図と土層断面 .....	12
第2図 館林市の地形概念図 .....	2	第14図 下新田遺跡(令2地点)の範囲と調査地 .....	13
第3図 令和2年度調査遺跡位置 .....	2	第15図 調査図 .....	14
第4図 青柳城跡(令2地点)の範囲と調査地 .....	3	第16図 出土遺物 .....	15
第5図 調査図 .....	4	第17図 大島地区試掘(令2地点)の範囲と	
第6図 土層断面と出土遺物 .....	5	調査地 .....	16
第7図 出土遺物 .....	6	第18図 【試掘1・2】調査区位置と土層断面 .....	17
第8図 館林城跡・城下町(令2地点)の範囲と		第19図 【試掘3・4】調査区位置と土層断面 .....	18
調査地 .....	7	第20図 【試掘5】調査区位置と土層断面 .....	19
第9図 調査図と出土遺物 .....	8	第21図 出土遺物 .....	19
第10図 若宮遺跡(令2地点)の範囲と調査地 .....	9		
第11図 調査図と出土遺物 .....	10	第1表 遺物一覧 .....	20
第12図 北近藤第二地点遺跡(令2地点)の範囲と			
調査地 .....	11		

## 写真図版目次

### 青柳城跡(令2地点)

- 1-1 土木重機による掘削
- 1-2 土坑2 精査後
- 1-3 トレンチ2 精査前(西から)
- 1-4 溝1 遺物出土状況(西から)
- 1-5 トレンチ2 精査後(西から)
- 1-6 堆積状況
- 1-7 調査完了

### 北近藤第二地点遺跡(令2地点)

- 4-1 調査区全景
- 4-2 土木重機による掘削
- 4-3 トレンチ1 精査前(北から)
- 4-4 トレンチ2 深掘部(西面)
- 4-5 トレンチ1 精査後(北から)
- 4-6 トレンチ1 堆積状況(北面)
- 4-7 調査完了

### 館林城跡・城下町(令2地点)

- 2-1 調査区全景
- 2-2 土木重機による掘削
- 2-3 トレンチ1 精査前(南から)
- 2-4 トレンチ2 精査後(南から)
- 2-5 トレンチ2 西面堆積状況
- 2-6 調査完了

### 下新田遺跡(令2地点)

- 5-1 調査区全景
- 5-2 土木重機による掘削
- 5-3 トレンチ 精査前(北から)
- 5-4 トレンチ 遺物出土状況
- 5-5 トレンチ 精査後(北から)
- 5-6 土壌1 骨出土状況
- 5-7 調査完了

### 若宮遺跡(令2地点)

- 3-1 調査区全景
- 3-2 土木重機による掘削
- 3-3 トレンチ1 精査前(南から)
- 3-4 トレンチ2 精査後(南から)
- 3-5 トレンチ2 南面堆積状況
- 3-6 トレンチ2 西面堆積状況

### 大島地区試掘調査(令2地点)

- 6-1 調査区全景
- 6-2 土木重機による掘削
- 6-3 トレンチ 精査後[試掘1]
- 6-4 トレンチ 精査後[試掘2]
- 6-5 土木重機による埋め戻し
- 6-6 調査完了

出土遺物写真



# 第1章 館林市の環境

## 1. 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約7.5万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km<sup>2</sup>である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京(台東区浅草)へ約65kmの距離にあり、東京圏との結びつきも強い。

群馬県南東部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、標高15m(大島町東部)から33m程度(高根町)の平坦な低地である。本市の地形を概観すると、「洪積台地」と「沖積低地」に分けることができる。市街地が立地する「洪積台地」が東西に延び、その周辺に「沖積低地」が広がる。

この洪積台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれており、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根町にいたる台地の北側に沿って、日本最古級(約6~7万年前)の砂丘の一つである埋積河畔砂丘(館林古砂丘)が走っており、本市最高標高点(33.2m)はこの上にあった。

「沖積低地」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された。台地北側の低地帯には、旧河道や微高地、自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は樹枝状に開析され、沖積低地に延びる多くの谷地を形成している。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地の谷には茂林寺沼・蛇沼・近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市の特徴の一つとなっている。

## 2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は147箇所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書)には、そのうちの144箇所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した各時代の遺跡数は、次のとおりである(複合した時代の遺物散布地がみられるため、その中心になると考えられる時代でまとめた)。

旧石器時代は4遺跡(遺物は9遺跡で確認)、縄文時代は10遺跡(縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代は2遺跡(遺物は5遺跡で確認)。古墳時代~平安時代(土師器の出土した遺跡)は93遺跡(うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は41遺跡)。古墳は18遺跡(古墳总数25基)、中世以降の生産址1遺跡、中世~近世の城館跡は15遺跡、城館以外で中世・近世の遺物が多く出土するのは4遺跡である。

これらの遺跡の分布は地形的な特徴と大きく関わっており、館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりをおおまかに述べると、次のようになる。

### 《旧石器時代》

この時代の遺跡は、山神駒遺跡や水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡など、邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋積河畔砂丘上で多く分布している。また、大袋II遺跡や間堀I遺跡など低地を望む舌状台地上の遺跡でも当該期と考えられる資料が確認されている。

### 《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増加し洪積台地上に遺跡が分布する。前期や中期の遺跡は、加法師遺跡や間堀I遺跡など、池沼や谷地を望む台地上の平坦面に集落を形成している。確認できる遺跡数は後期以降減少するが、洪水堆積層の下で確認できることが多く、より低地で痕跡が残される傾向がある。

### 《弥生時代》

弥生時代の遺構は確認されていないが、大袋I遺跡や小林遺跡など微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

### 《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。道溝遺跡は洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在しており、この傾向は弥生時代の遺物散布に似ている。中期には遺跡の数が増えるとともに、その所在は台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には遺跡数は増大し、北近藤第一地点遺跡や当郷遺跡など台地上の平坦部に所在する場合が多い。



第1図 館林市の位置

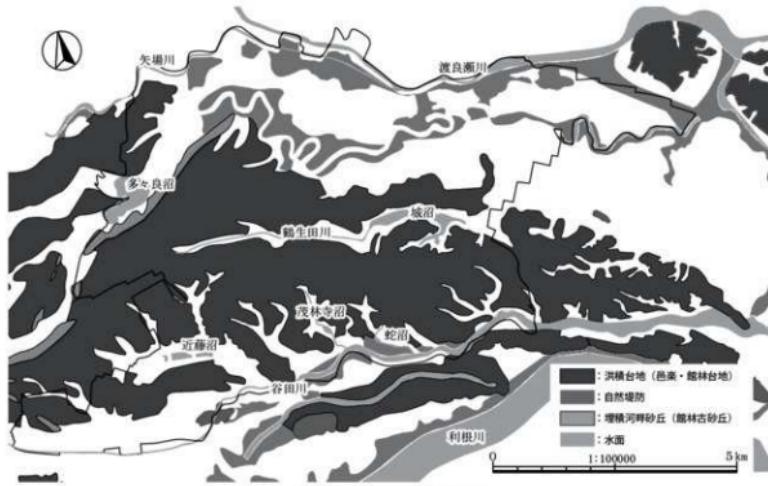
墳墓としての古墳は、推定地も含め33基が残存している(『館林市史 資料編1』参照)。古墳群が2箇所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする埋積河畔砂丘上にある。そのほかに単独のものも多いが、そのいずれも谷や谷地等を見おろす洪積台地上に所在している。

### 《奈良・平安時代》

この時代の遺跡の痕跡は多く残る。台地の端部に限定されず遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれていたと考えられる。

### 《中世・近世》

この時代の城館跡については、伝承的な要素が多く実態は判然としない。しかし、谷や小河川などの自然地形を利用し中世末には館林城が、近世には館林城を中心として城下町が形成され、その町割りは今も残っている。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 令和2年度調査遺跡位置

## 第2章 確認調査の概要

### 1. 青柳城跡(令2地点)

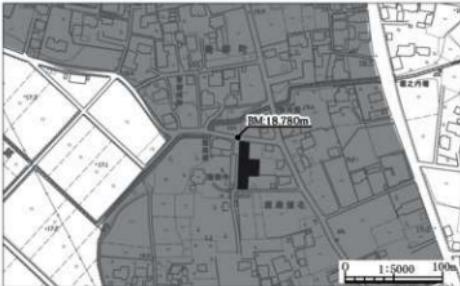
遺跡番号	0099
時代種別	中世(城館跡)
調査地	館林市青柳町鹿島道北673-1
調査原因	ガス・電気・水道等(太陽光発電)
調査期間	令和2年6月13日～6月24日 〔内6日間〕
調査面積	約60.0m <sup>2</sup>

#### (1) 遺跡と周辺の環境

「青柳城跡」は、邑楽館林台地の南辺部に位置する中世の城館跡である。調査地周辺の現況は住宅地と農地としての利用が主である。

同遺跡では昭和62年度に調査が行われ、中近世のカワラケが出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の中央付近に位置し、基準点の標高は18.780m(19.609mを移動)である。



第4図 青柳城跡(令2地点)の範囲と調査地(1/5000)

#### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西・南北方向に2本ずつトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。機械高は20.500mとした。

#### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅴ層である。

Ⅰ層は表土である(層厚15cm程度)。最近耕運機をかけられた上層と下層に分けられる。Ⅱ層は暗褐色土層(10YR3/3)であり、粘性ややあり、縮まりあり、漸移層であるがほとんどが耕作の影響で残されていない(層厚約10cm)。Ⅲ層は上部ローム層(にぶい黄褐色10YR4/3)。粘性あり、縮まり強い(層厚約30cm)。Ⅳ層は暗色帶(暗褐色10YR3/3)であり、粘性あり、縮まり強い。Ⅴ層は中部ローム層(褐色10YR4/4)で、粘性あり、縮まり強い。地表より80cm程度で到達する。

#### (4) 確認された遺構

溝1条(中世)、土坑3基(縄文1、時期不明2)、井戸1基(時期不明)が確認された。

溝1の覆土上部より、中世の内耳土器片(第7図-42)が1点出土したが、同一標高で縄文土器片や近世陶器も出土している。土坑2は縄文時代後期の有段土坑と考えられるが、覆土は硬く縮まり、炭化粒を多く含む層もあることから、その用途は不明である。埋積状況を確認するため便宜的に深度5cmごとに籠を分け精査を行った(有段部: 深度40cm分)。称名寺式土器と堀之内式土器に比定される土器片が大部分を占め、堆積状況に偏重はみられないことから後期以降短期間で埋積したものと考えられる。底面はさらには30cm程度掘り込まれていると想定される。土坑1・3は遺物が出土しないため時期不明。井戸1は当初土坑としていたが、掘削深度からさらに80cm以上掘り込まれていることが想定され、標高17m程度で湧水があることから、構築物は確認されなかつたが井戸とした。

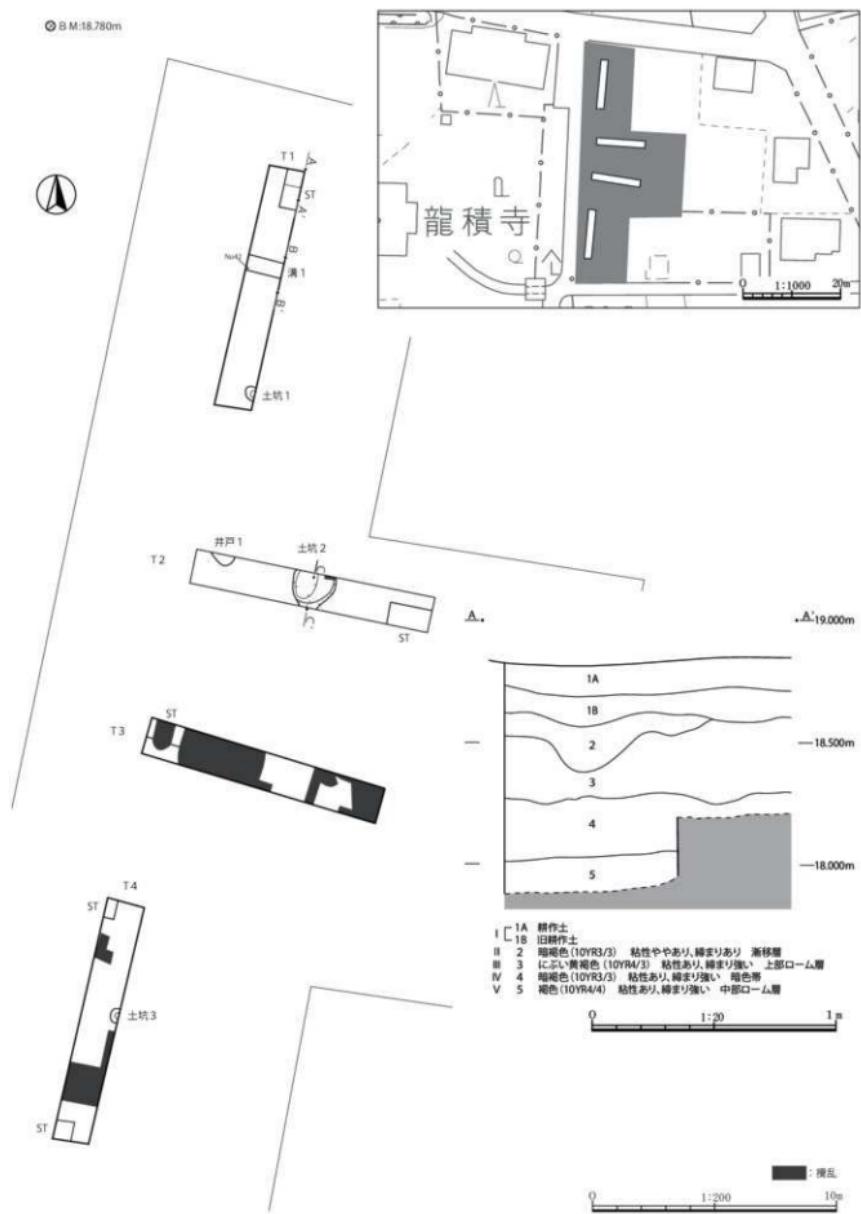
#### (5) 出土遺物(第6・7図)

確認された遺物は、縄文土器片(後期)を中心に、陶磁器片など300点程度である。称名寺式土器片は新段階のものが多く、列点や櫛状工具による刻みを施す(9・14・18・46)。主要であると想定された中世の遺物は希薄だが、内耳土器(37・42)が出土した。

#### (6) まとめ

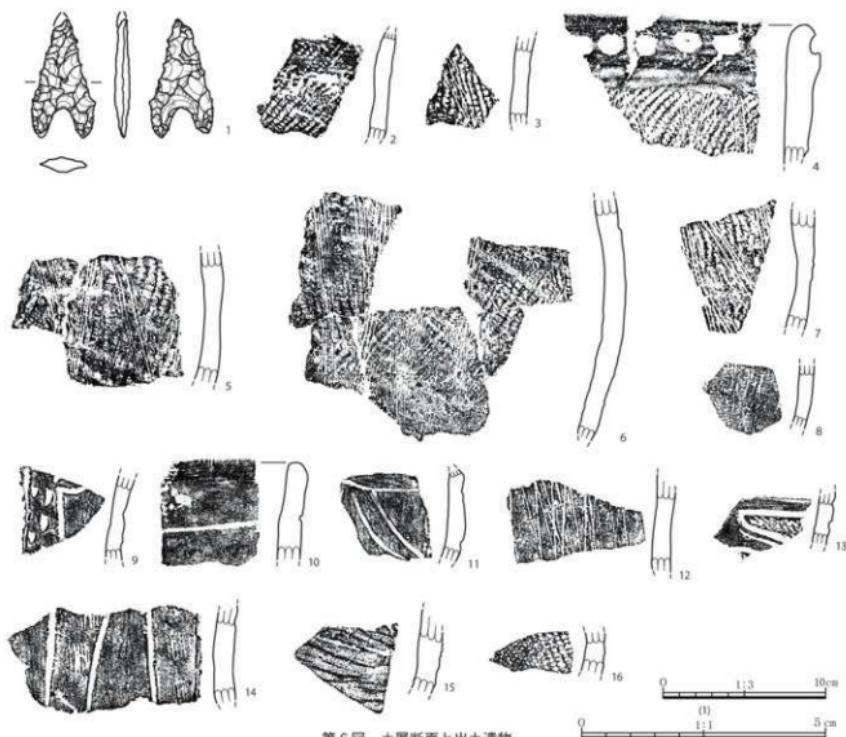
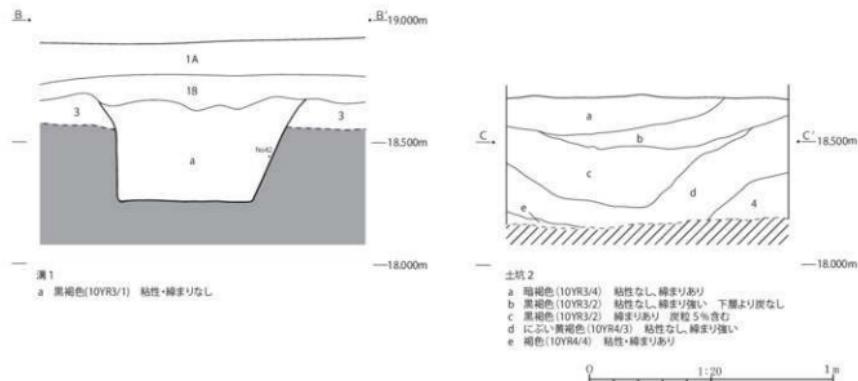
調査の結果、地表より55cm程度で暗色帶(AT 火山灰降下層)まで到達することが確認された。上部ローム層は30cm程度しか堆積しておらず、耕作の影響を考慮しても市内の縄文時代以降の堆積の薄さを再確認できた。

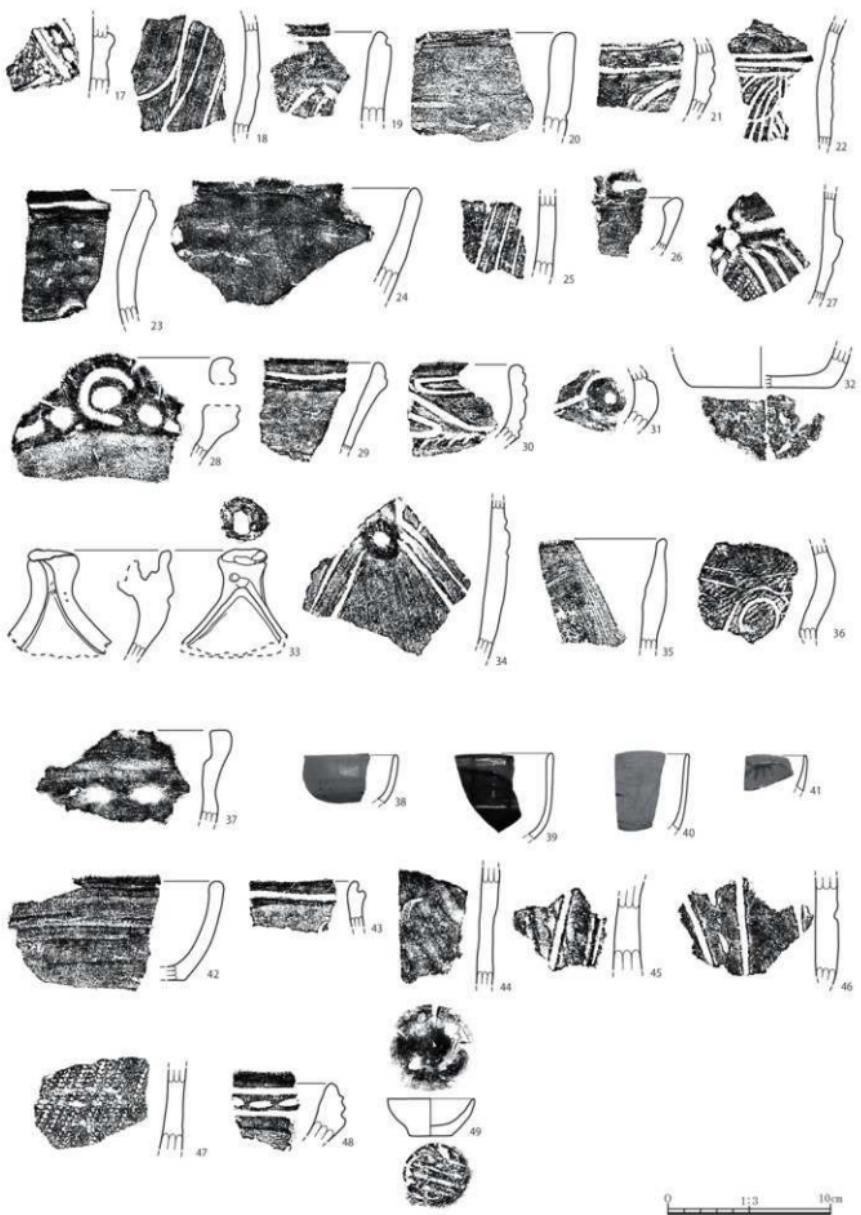
縄文時代の遺構が確認されたため、開発計画との協議が必要と判断した。開発業者と協議をした結果、遺構範



第5図 調査図

面を掘削しない工法へと計画変更された。保護層が確保できるため「群馬県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準」により、埋蔵文化財への影響は軽微であると判断した。





第7図 出土遺物

## 2. 館林城跡・城下町(令2地点)

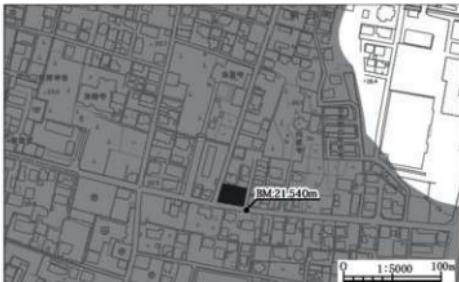
遺跡番号	0033
時代種別	縄文・古墳・中世・近世
(城館跡・散布地)	
調査地	館林市朝日町1025-2、1028-6
調査原因	集合住宅
調査期間	令和2年7月20日～7月21日 (2日間)
調査面積	約22.4m <sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「館林城跡・城下町」は館林市のほぼ中央部に位置する近世の城館跡である。牙城部は城沼に突出する舌状台地上に位置し、周辺地形を利用し堀を配した総郭となる。柳原康政をはじめとする7家17代の城居およびその城下町として栄えたが、城および城下町が存した位置と現在の市街地が近似しているため、これまでの開発により城郭としての遺構の多くは失われている。城自体の遺構としては本丸・三の丸に一部土塁が残存しているのみである。

本遺跡ではこれまでに土橋門の復元や本丸、土塁に係る調査が16地点(昭57地点、平元・2・5・6・7・11・12・23・22・24A・24B・27・29地点、令元年度は2地点)で行われている。特に平成27年度の土星推定範囲内で行われた調査では、土星の構築年代を類推するうえで参考となる資料がまとまって出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の中央付近に位置し、基準点の標高は21.540mである。



第8図 館林城跡・城下町(令2地点)の範囲と調査地(1/5000)

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に2本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土壟断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。機械高は23.500mとした。なお埋め戻しは調査期間の短縮のため、工事施工業者が実施した。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～IV層である。

I層は表土である(層厚20cm程度)。従前建物の影響もあり、一部水道管等のインフラ設備の痕跡が確認された。II層は上部ローム層(にぶい黄褐色10YR4/3)であり、粘性・縮まりあり。T2南、調査区の北東部分の擁壁設置に伴う掘削部分で確認された。III層は暗色帶(暗褐色10YR3/3)であり、粘性・縮まりあり。調査区南にいくにつれて削平されていると考えられる。IV層は中部ローム層(にぶい黄褐色10YR5/4)で、粘性・縮まりあり。調査区南の道路の高さ(21.540m程度)ではIII層以上は残っていない。

### (4) 確認された遺構

土坑1基(近世1)、ピット2箇所が確認された。

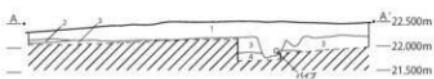
土坑1はT1で確認され、暗色帶を掘り込んでおり、深さは地表面下より40cm程度であるが、上部が削平されている。近世～近代の陶磁器・瓦が出土した。ピットは2箇所とも同質で、径25cm、確認面より10cm程度の掘り込みで約3mの間隔がある。北側のピット内からは長径20cm厚さ2cm程度の片岩が出土したが、礎石かどうかは不明。堆積状況から近代のものと考えられる。

### (5) 出土遺物(第9図)

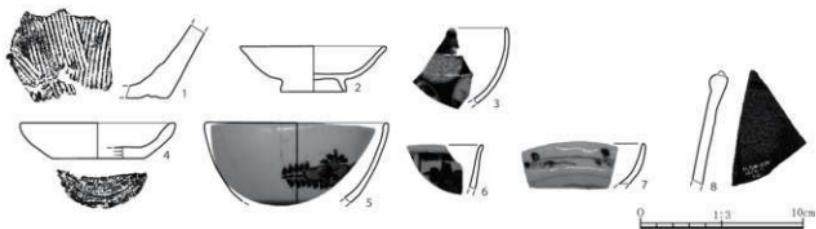
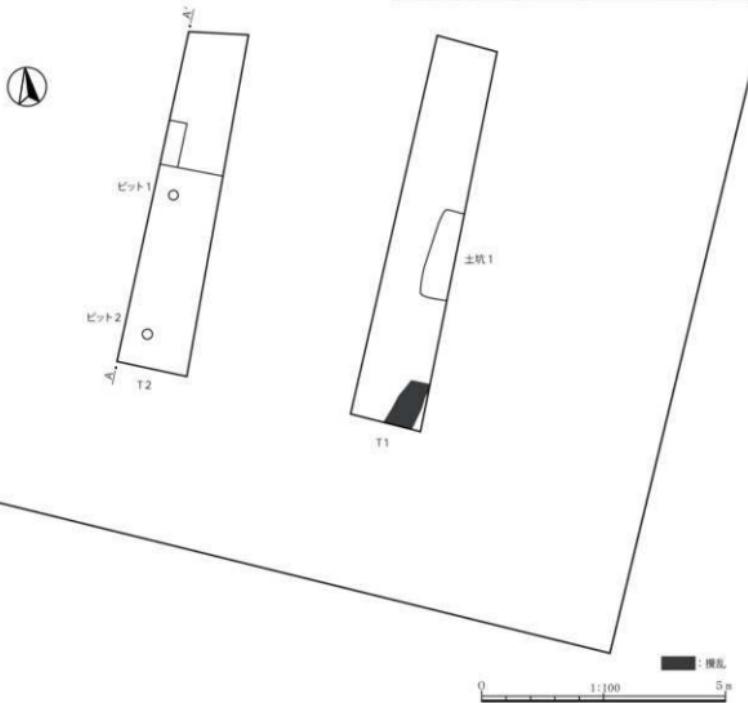
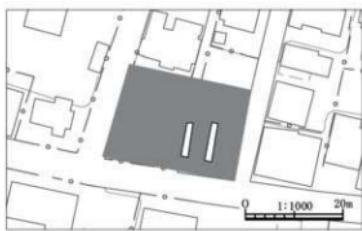
確認された遺物は、近世～近代の陶磁器を中心に、近世のカワラケ・すり鉢片など60点程度である。

### (6)まとめ

調査の結果、調査範囲の特に南側で上部ローム層および暗色帶が削平されている状況が確認された。南東方向に傾斜している場所ではあるが、調査区北東端の堆積状況から、上部ローム層・暗色帶は堆積していたことが想定されるため、削平により多くの痕跡も消失してしまっている。このことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



- I 1 表土 塵状軽体による影響あり
- II 2 にふい黄褐色(10YR4/3) 粘性・練まりあり 上部ローム層  
T 2面と調査区北東のみで確認 1m程度盛土されたか
- III 3 黒褐色(10YR3/3) 粘性・練まりあり 暗色層
- IV 4 にふい黄褐色(10YR5/4) 粘性・練まりあり 中部ローム層



第9図 調査図と出土遺物

### 3. 若宮遺跡(令2地点)

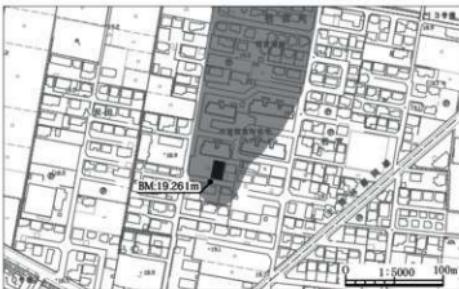
遺跡番号	0037
時代種別	平安(散布地)
調査地	館林市若宮町若宮2751-8
調査原因	個人住宅
調査期間	令和2年10月12日～10月15日 (内4日間)
調査面積	約36mi

#### (1) 遺跡と周辺の環境

「若宮遺跡」は、館林市の中心部の北に位置する平安時代の遺物の散布地である。旧流路の自然堤防上に位置し、周辺は住宅地や農地としての利用が主である。

本遺跡ではこれまでに調査は実施されていない。

今回届出のあった土地は遺跡の南端付近に位置し、基準点の標高は19.261m(18.793mを移動)である。



第10図 若宮遺跡(令2地点)の範囲と調査地(1/5000)

#### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に2本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。機械高は20.500mとした。

#### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～Ⅲ層である。

I層は表土である(厚層20cm程度)。大部分の表層は砂利敷きであり、従前建物の影響も多くある。II層は二次堆積ローム質層(にぶい黄褐色10YR5/4)であり、粘性あり、締まり強い。粒子が細かくやや砂質。調査地一面に広がっている。III層は砂質シルト層(3層～7層)であり、3層(暗灰黄色2.5Y4/2)・4層(暗褐色7.5VR3/4)は旧耕作土と耕盤層と考えられるが、特に3層は砂質であり、洪水の影響を受けている可能性がある。5層は、オリーブ褐色土層(2.5Y4/3)であり、古代の遺物の多くはこの層より出土した。3層より砂質が強く、板状構造(2mm～5mm)の斑鉄(4cm～15cm程度)を含むことから草などの繁茂する湿地環境下での堆積と想定される。6層は砂層であり(灰黄褐色：10YR5/2)、締まりがある。7層は灰黄褐色土層であり(10YR4/2)、5層より斑鉄減り、湿性が強くなる。やや粘土質で締まりなし。この層以下で湧水。

#### (4) 確認された遺構

遺構は確認されなかった。

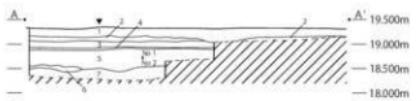
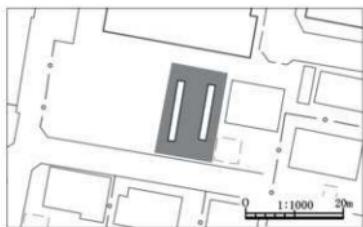
#### (5) 出土遺物(第11図)

確認された遺物は、奈良・平安時代の黒色土器、近世の陶磁器など50点程度である。復元可能な個体はない。摩滅している小破片が多く、異地性が高いと考えられる。カワラケの底部片も出土した。

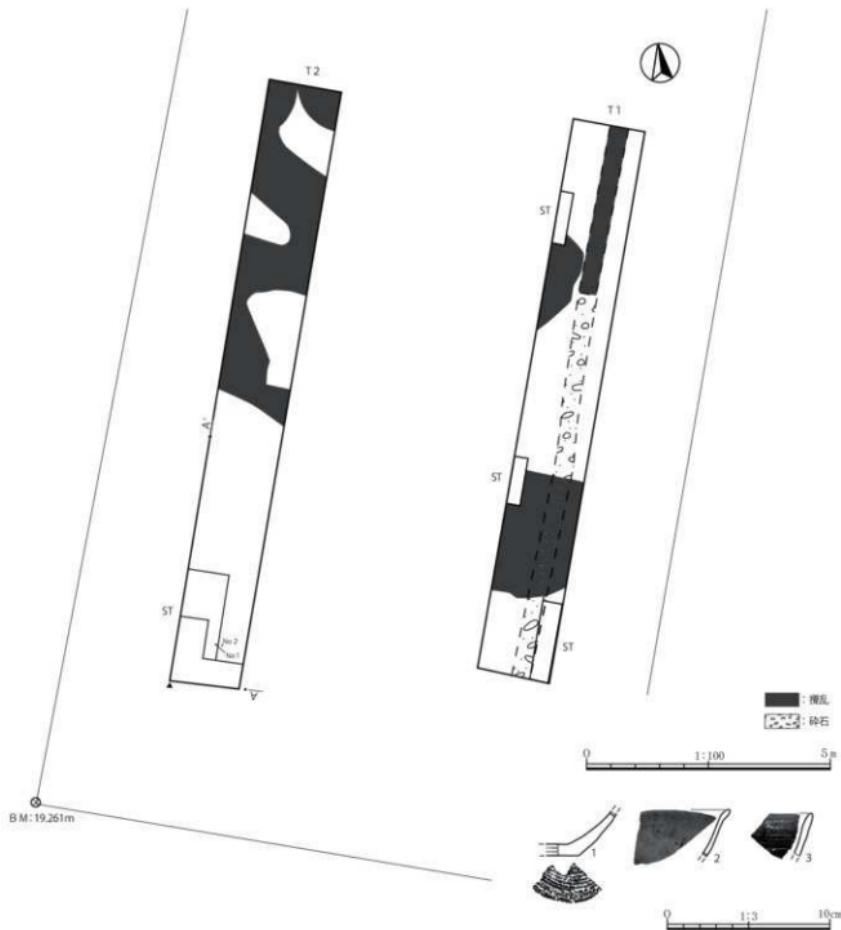
#### (6)まとめ

調査の結果、二次堆積ローム層が広範囲に堆積していることが確認された。旧耕作土と考えられる堆積の上部に堆積しており、一括性が高く砂を含むことなどから洪水堆積層と考えられる。若宮町は明治43年の洪水で1m～1.9mの浸水とされており(『館林市史通史編3』133頁)、下層から近世以降の陶磁器が出土することからその際の堆積物の可能性もある。遺跡の範囲は迅速測図でも畑になってしまっており、自然堤防上の微高地であると想定されるが、湿地環境の堆積物に出土遺物の多くが含まれることから、流路ではないものの旧矢場川の影響を多く受けた状況であったと考えられる。さらに自然堤防の発達した地点の調査が望まれる。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかっことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



- I  
II
- 1 土壌 上部10cm砂岩 粘性あり、締まり難い 二次堆積ローム質層  
乾燥地帯でくちや砂質 (洪流水堆積物) (8m厚)
  - 2 鹿の子色 (2.5Y4/2) 粘性なし、締まりあり 塗膜を20%含む
  - 3 鹿の子色 (2.5Y4/2) 粘性なし、締まりあり 耕型層か
  - 4 オリーブ褐色 (2.5Y3/4) 粘性なし、締まりあり 精耕層か
  - 5 板状構造 (2mm~5mm) の斑状 (4cm~15cm程度) を5%含む  
湿地か 遺物包含層
  - 6 深黄褐色 (10YR5/2) 粘性なし、締まりあり 砂層
  - 7 深灰褐色 (10YR4/2) やや粘土質、締まりなし 5層より斑状減る 混性



第11図 調査図と出土遺物

#### 4. 北近藤第二地点遺跡(令2地点)

遺跡番号	0092
時代種別	古墳・奈良・平安(散布地)
調査地	館林市苗木町北近藤2578-3、2578-4、2578-5
調査原因	その他建物(特別養護老人ホーム)
調査期間	令和2年12月11日～12月17日 (内4日間)
調査面積	約38.4m <sup>2</sup>

##### (1) 遺跡と周辺の環境

「北近藤第二地点遺跡」は館林市の西部に位置する古墳・奈良・平安時代の遺物の散布地である。近藤沼を形成する開析谷の北岸台地上に位置し、周辺は住宅地や工業団地としての利用が主である。

本遺跡ではこれまで平成26年度に調査が行われ、溝状遺構などが確認されている。今回届出のあった土地は平26地点の隣接地で、遺跡の南西端付近に位置する地点であり、基準点の標高は20.836m(21.720mを移動)である。

##### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北・東西方向方向に2本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。機械高は22.500mとした。

##### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

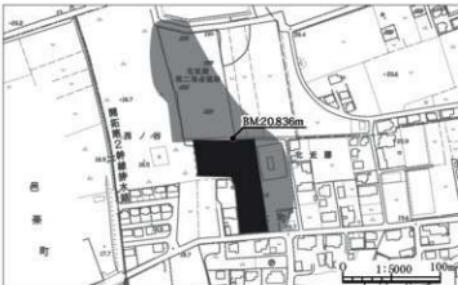
Ⅰ層は表土である(層厚最大80cm程度)。T 1では、碎石(1 A)・土盛り(1 B)・旧耕作土がそれ以下であり(陸田の畔含む)、最下層は重機などの掘削の痕跡(1 G)がある。Ⅱ層はにぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)であり、いわゆる上部ローム層。T 2で確認。Ⅲ層は暗褐色粘質土(10YR3/3)であり、いわゆる暗色帶。Ⅳ層は褐色粘質土(10YR4/4)であり、いわゆる中部ローム層。

##### (4) 確認された遺構・遺物

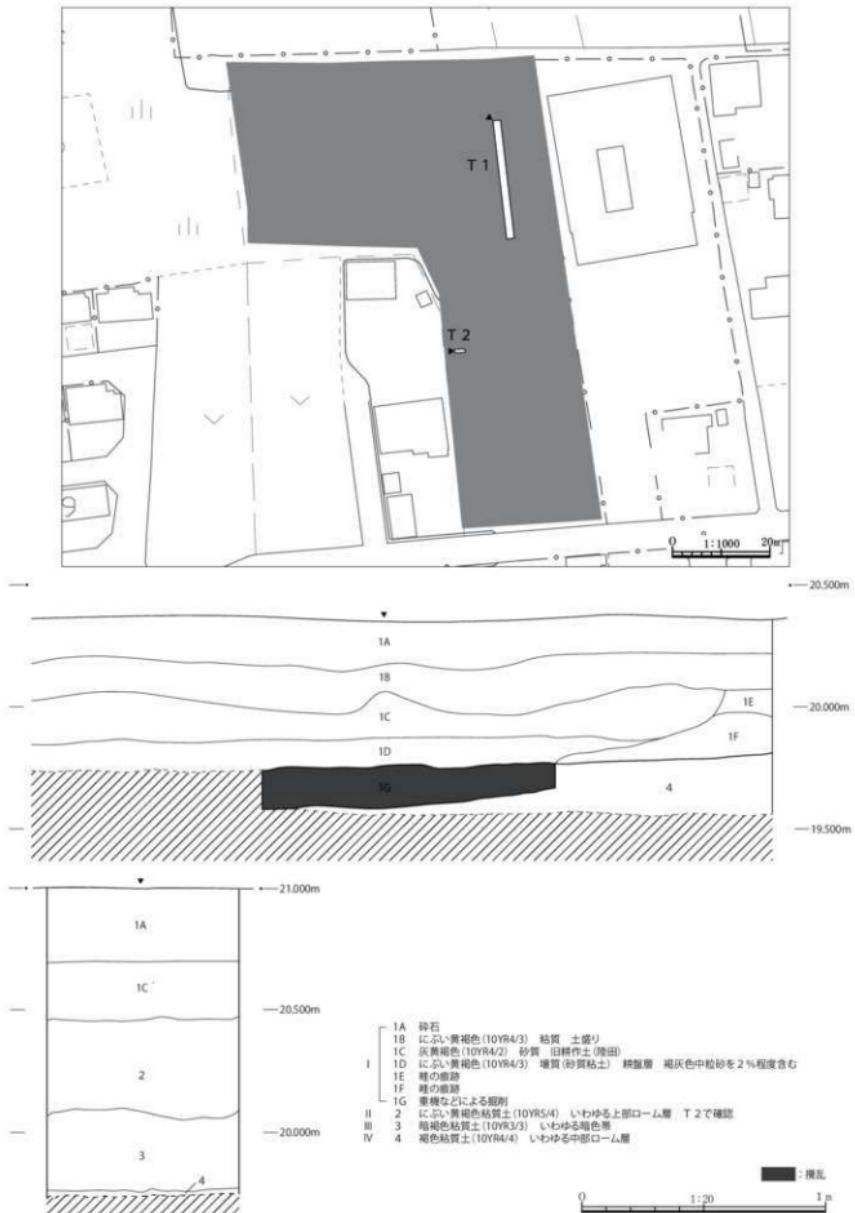
遺構・遺物は確認されなかった。

##### (5)まとめ

調査の結果、耕作など後世の土地の変更の影響を多く受けていることが確認された。T 1では陸田の畔や、耕盤層だけでなく、全体的に土盛りが行われ、碎石が入れられている状況であった。T 1西側の隣地の耕作面と同様のレベルではあるが、調査区南とも不自然に段差があり、堆積も中部ローム層以上がないことから大規模な土取りが想定される。このことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



第12図 北近藤第二地点遺跡(令2地点)の範囲と調査地(1/5000)



第13図 調査図と土層断面

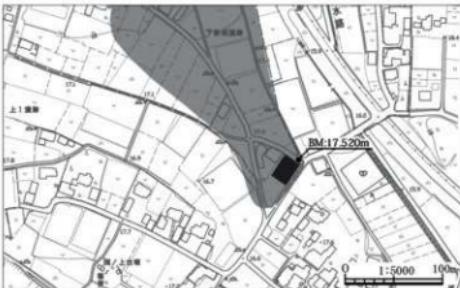
## 5. 下新田遺跡(令2地点)

遺跡番号	0134
時代種別	平安(散布地)
調査地	館林市赤生田町下新田106-1
調査原因	個人住宅
調査期間	令和3年1月26日～1月27日
調査面積	約18m <sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「下新田遺跡」は館林市の南東部に位置する平安時代の遺物の散布地である。邑楽・館林台地の南側を流れる谷田川と沖積低地から延びる谷に囲まれた微高地上で、周辺は古くからの住宅と畑としての利用が主である。

本遺跡ではこれまで調査は実施されていない。基準点の標高は17.520m(都市計画基本図17.4mを移動)である。



第14図 下新田遺跡(令2地点)の範囲と調査地(1/5000)

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に1本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。機械高は19.000mとした。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅱ層である。

Ⅰ層は表土である(層厚最大50cm程度)。ハウスの支柱痕が190cm間隔で確認された。Ⅱ層は褐色粘質土(10YR4/6)であり、いわゆるローム層。縮まりややあり。

### (4) 確認された遺構

土壌1基(縄文)、溝2条(中近世)が確認された。

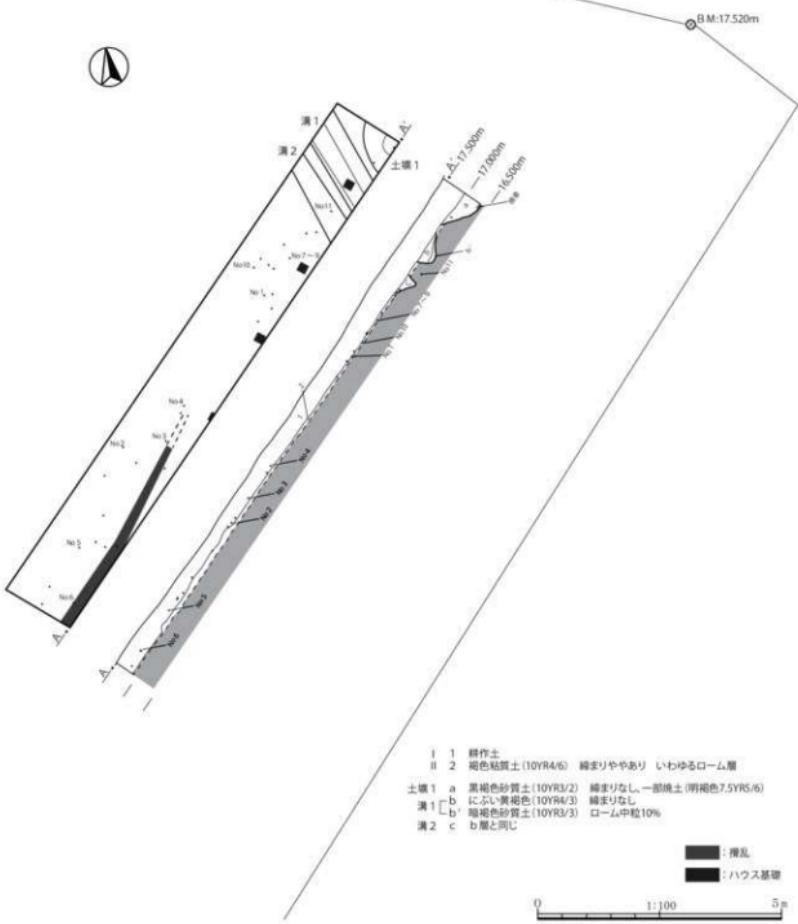
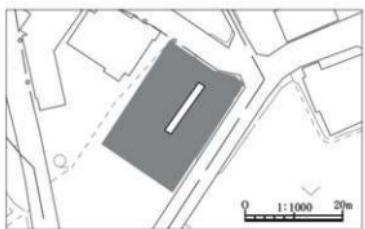
土壌1は、底部から長さ4cm・幅1cmの骨が出土した。劣化が著しく取り上げはできなかった。一部に焼土が認められることから焼骨の可能性もある。覆土上部から縄文土器片が1点確認されたが、耕作の影響も想定される。溝2条は東西方向に並行に延びている。断面形状が異なるが、覆土は同質である。溝1から内耳土器が出土した。

### (5) 出土遺物(第16図)

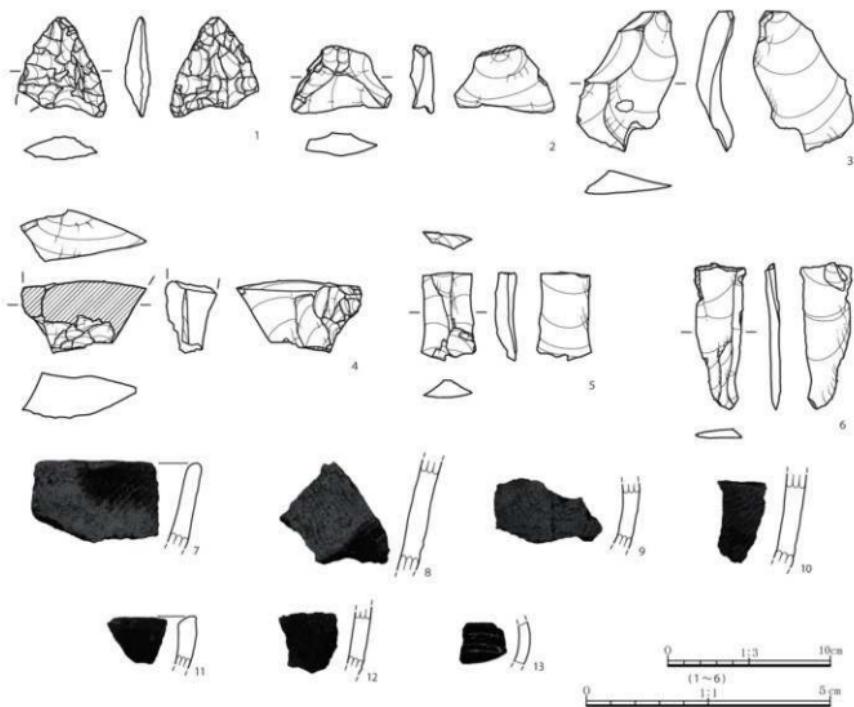
確認された遺物は、縄文時代の石器を中心に、縄文土器片、土師器片、陶磁器片など60点程度である。出土した石器はほとんどがいわゆるローム層直上から出土しているが、チャート製の石鏃も含まれるため、時代的評価は難しい。近辺には古墳も築造される微高地ではあるため、縄文時代以前の痕跡が残されている可能性は否定できないが、同様の調査事例や類似資料の出土はない。縄文時代前・中期の土器片も出土しているが、小破片である。平安時代の散布地であったが、石鏃や土器等が主であり、むしろ縄文時代以外の痕跡が希薄であった。

### (6)まとめ

調査の結果、耕作土直下から遺物の出土がある状況を確認した。地権者の話では耕作中に土師器の壺も出たとの話もあることから、今後も当遺跡での調査が必要となる。保存を要する遺構を確認できなかっことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



### 第15図 調査図



第16図 出土遺物

## 第3章 試掘調査の概要

### 大島地区(令2地点)

- 調査地  
〔試掘1〕館林市大島町岡里前2417-1  
〔試掘2〕小原草2543-2  
〔試掘3〕下八ツ島2813-1  
〔試掘4〕下八ツ島2910  
〔試掘5〕上新田3664
- 調査原因 その他開発(工業団地造成)  
調査期間 令和2年12月25日～令和3年2月25日  
〔5日間〕※内2日は原点移動
- 調査面積 約61.8m<sup>2</sup>

#### (1)遺跡と周辺の環境

対象地は館林市の北東部に位置する低地である。周辺は古くからの畠と水田としての利用が主で特に渡良瀬川旧流路の自然堤防上に古くからの集落が形成されている。

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、今回の開発計画が広範囲において(約56.2ha)、近隣では大島下悪途遺跡など古墳時代前期の集落跡なども確認されていることから、試掘調査を実施することとした。調査に先駆けて基準点を5箇所設定した(一級基準点17.20mを使用)。

#### (2)調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西・南北方向にトレーニングを設定し、土木重機により現耕作土と下層の堆積土が混在しないよう留意しながら表土を排除した。その後、土層断面の観察を行い、構造・遺物の有無、土中の状態を確認した。確認後、おおよそ30cm毎に重機と締固め用機械を用いて転圧をかけ、表土を戻し現状復旧した。



第17図 大島地区試掘(令2地点)の範囲と調査地(1/7500)

#### (3)基本層序

本地区の基本層序はI層～II層である。

I層は表土である。現耕作土と耕盤層からなる(層厚最大60cm程度)。II層は水成堆積層である。II層の多くは高師小僧や雲母片を含み、特に渡良瀬川の影響を受けているものと推察される。II層について各地点の特色のある層を示す。

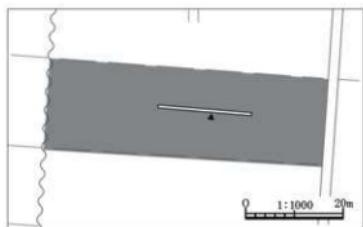
〔試掘1〕3層は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトで斑鉄10%、雲母2%、極小炭化粒5%含む。14.500m程度で湧水か(第18図)。

〔試掘2〕5層は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂層で3層より砂質。この層より遺物が出土した(第18図)。

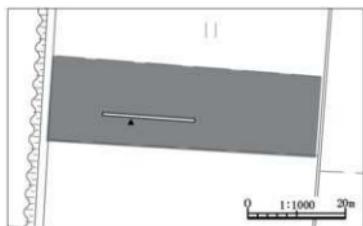
〔試掘3〕3層は灰褐色(7.5YR4/2)シルト質粘土層で斑鉄を15%含む(φ5mm)。5層は黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層で、3層より粘質。斑鉄を10%程度含む。6層にはぶい黄橙色(10YR7/2)粘土質シルト層。7層は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであり、3層・5層～7層の斑鉄の大部分が上部を北方向に傾ける。迅速測図に残る流路の方向と直交することから、流路との関係は不明。しかし、土質と粒度の変化があることから堆積環境が変化している(第19図)。

〔試掘4〕2層がほかの地点より厚く、周辺と比べても標高が高い。耕地整理の影響か、盛土を行っていると想定される。7層は褐灰色(7.5YR6/1)シルト質極細粒砂である。雲母片を含む(第19図)。

〔試掘5〕3層・6層・9層に高師小僧が発達している層が確認できる。7層の褐灰色(10YR5/1)シルト層は試掘3の4層の褐灰色シルト層(10YR5/1)と同質である。試掘5の砂の円磨度は0.2～0.3程度である(第20図)。



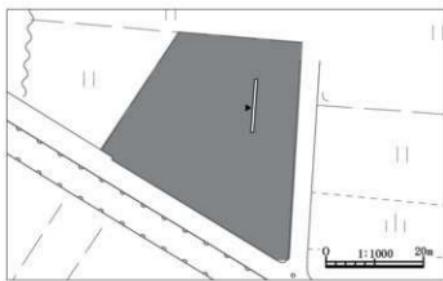
【試掘1】  
岡里前2417-1  
(基準点:15.245m(BM2:15.741mを使用), 機械高:16.500m)



【試掘2】  
小草原2543-2  
(基準点:15.288m(BM2:15.741mを使用), 機械高:19.000m)



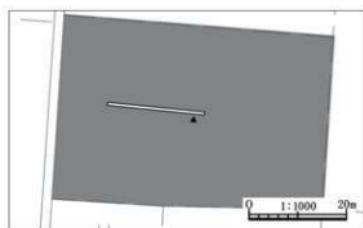
第18図 【試掘1・2】調査区位置と土層断面



【試掘3】

下八ツ島2813-1

(基準点:16.474m(BM3:16.474mを使用),機械高:17.500m)



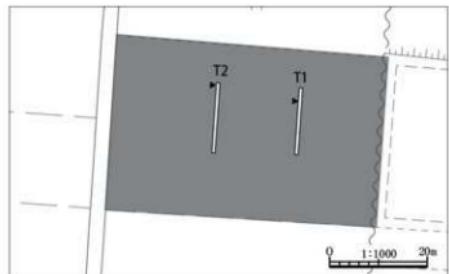
【試掘4】

下八ツ島2910

(基準点:16.182m(BM3:16.474mを使用), 機械高:17.500m)



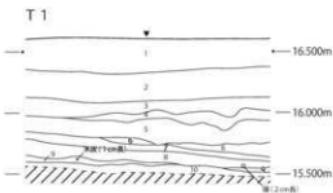
第19図 【試掘3・4】調査区位置と土層断面



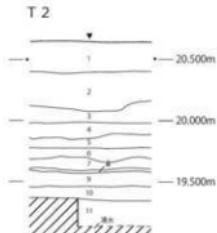
【試掘5】

上新田3664

(基準点:16.815m(BM5:16.565mを使用),機械高:18.000m)



- 1 表土(耕田)
- 2 精耕層
- 3 にふい黄褐色(10YR4/3) 細粒砂 磁鉄(30%) 露母片 円磨度0.2~0.3
- 4 床黄色(2.5Y6/2) 細粒砂 磁鉄(10%) 露母片(多) 円磨度0.2~0.3
- 5 黄褐色(2.5Y5/3) 細粒砂 露母片, 磐(5mm) 炭化物(1%) 円磨度0.2~0.3
- 6 喀灰黃色(2.5Y4/2) シルト質細粒砂 磁鉄(40%) 方向ばらつく 露母片 円磨度0.2~0.3
- 7 喀灰色(10YR5/1) シルト 露母片 円磨度0.2~0.3
- 8 喀灰黃色(2.5Y4/2) 中粒砂 露母片(1mm程度) 多 円磨度0.2~0.3
- 9 喀灰褐色(7.5YR4/2) 細粒砂 磁鉄 露母片 底(1cm程度)あり 湿地環境か 円磨度0.2~0.3
- 10 にふい黄褐色(10YR5/3) 細粒砂 露母片 底(2cm程度) 1点 円磨度0.2~0.3



- 1 表土(陸田)
- 2 精耕層
- 3 にふい黄褐色(10YR4/3) 細粒砂 高鈣小石(30%) 露母片
- 4 にふい黄褐色(2.5Y5/3) 細粒砂 露母片(1mm程度) 炭化物(1%)
- 5 黄褐色(2.5Y5/2) 細粒砂 露母片 上層より少
- 6 喀灰黃色(2.5Y4/2) シルト質細粒砂 磁鉄(40%) 方向ばらつく 露母片
- 7 喀灰黃色(2.5Y4/2) 中粒砂 露母片(1mm程度) 多
- 8 喀灰色(7.5YR4/2) 細粒砂 磁鉄 露母片 底(1cm程度)あり 湿地環境か
- 9 にふい黄褐色(10YR5/3) 露母片 中粒(2cm程度) 1点
- 10 黄褐色(2.5Y4/1) 粗粒砂 露母片 長さ25cm幅6cmの木材 1点
- 11 喀灰色(10YR4/1) シルト質細粒砂 下で湧水



第20図 【試掘5】調査区位置と土層断面

#### (4)出土遺物(第21図)

確認された遺物は、土師器や陶磁器片などであり、耕作や氾濫の影響を受けており異地性が高い。試掘2では最下層から遺物が出土した。周辺で遺物が確認されなかった。

#### (5)まとめ

調査の結果、人為堆積は確認できなかった。試掘2で遺物が1点層中から出土したが、それ以外に出土層位が明確な資料はなく、全体的に遺物の出土量も希薄であった。包蔵地化するには面的な把握が必要になるが、耕作している状況ではさらなる調査実施は難しい。なお、開発は土盛りを基本とする予定である。



第21図 出土遺物

第1表 遺物一覧

遺跡名	回収番号	出土地点	種類 基準	調査の特徴、残存率など	備考
貨物船跡 (合2地點)	6 - 1	印旛無葉石器	括書き: 2,44, 縮: 1.33, 厚さ: 0.32, 重さ: 0.68, 先端部・片側端部が欠損		チャート
	6 - 2 T 2	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文		調文初期
貨物船跡 (合2地點)	6 - 3 T 2 no. 4	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文		調文中期
	6 - 4 T 2	深鉢	口縁部片, 6-3と同一か		調文中期
	6 - 5 T 2 no. 45-50ca	深鉢	口縁部片, 6-3と同一か		調文中期
	6 - 6 T 2 no. 5	深鉢	口縁部片, 6-3と同一か		調文中期
	6 - 7 T 2 no. 2	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文		調文中期
	6 - 8 T 2 45-50ca	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文		調文中期～後期初頭
	6 - 9 T 2 45-50ca	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文し磨消		調文・軒名寺式
	6 - 10 T 2 45-50ca	深鉢	口縁部片		調文後期初頭
	6 - 11 T 2 45-50ca	深鉢	銅部片		調文後期初頭
	6 - 12 T 2 40-85ca	深鉢	銅部V		調文後期初頭
貨物船跡 (合2地點)	6 - 13 T 2 70-75ca	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文し磨消		調文後期初頭
	6 - 14 T 2 75-80ca	深鉢	銅部片, 錫製工具		調文・軒名寺式
	6 - 15 T 2 75-80ca	深鉢	銅部V		調文後期初頭
	6 - 16 T 2 80-85ca	深鉢	銅部V, 幾文L.Rを施文		調文後期初頭
	7 - 17 T 2 80-85ca	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文し磨消		調文後期初頭
	7 - 18 T 2 85cm以下	深鉢	銅部V, 錫製工具		調文・軒名寺式
	7 - 19 T 2 85cm以下	深鉢	口縁部片		調文後期初頭
	7 - 20 T 2 85cm以下	深鉢	口縁部片		調文後期初頭
	7 - 21 T 2 no. 3	深鉢	口縁部片, 地紋に幾文L.Rを施文し磨消		調文後期初頭
	7 - 22 T 2	深鉢	銅部V		調文・軒之内式
船形罐跡 (合2地點)	7 - 23 T 2 土坑 2 ST	深鉢	口縁部片		調文・軒之内式
	7 - 24 T 2 土坑 2 ST	深鉢	口縁部片		調文・軒之内式
	7 - 25 T 3	深鉢	銅部V		調文後期
	7 - 26 T 3 45-50ca	深鉢	口縁部片		調文後期
	7 - 27 T 3 50-55ca	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを施文		調文・軒之内式
	7 - 28 T 3 70-75ca	深鉢	口縁部片		調文・軒之内式
	7 - 29 T 3 70-75ca	深鉢	口縁部片		調文・軒之内式
	7 - 30 T 3 60-65ca	深鉢	口縁部片, 地紋 L.Rを施文し磨消		調文後期
	7 - 31 T 3 40-45ca	深鉢	口縁部片, 銅片直貫		調文後期
	7 - 32 T 3 50-55ca	深鉢	底部片		調文後期
船形罐跡 (合2地點)	7 - 33 T 3 80-85ca	深鉢	口縁部片, 銅片直貫		調文後期
	7 - 34 T 3 85cm以下	深鉢	銅部V		調文後期
	7 - 35 T 3 75-80ca	深鉢	口縁部片, 錫製工具		調文後期
	7 - 36 T 3 25-30ca	口口土器	地紋 L.R		調文後期
	7 - 37 T 3	内口土器	口縁部片		中古世
	7 - 38 T 3	陶器器 調	瓶口・美濃		近世
	7 - 39 T 3	陶器器 調	肥前窓(内野山か)		近世
	7 - 40 T 3	染付 瓶	瓶口・美濃		近世
	7 - 41 T 3	染付 瓶	瓶口・美濃		近世
	7 - 42 潟 1 no. 1	内口土器	口縁部片		中世
若宮遺跡 (合2地點)	7 - 43 衣様	深鉢	口縁部片		調文・軒名寺式
	7 - 44 衣様	深鉢	銅部V		調文・軒名寺式
	7 - 45 衣様	深鉢	銅部片		調文・軒名寺式
	7 - 46 衣様	深鉢	銅部V, 斜点		調文・軒名寺式
	7 - 47 衣様	深鉢	銅部V, 地紋に幾文L.Rを左右に施文		調文後期初頭
	7 - 48 衣様	深鉢	口縁部片, 錫製工具による斜突		調文後期
	7 - 49 衣様	有明皿	残存率90%、底部系切り後板目直皿		中古世
	9 - 1 T 1	寸刀鋸			中古世
	9 - 2 T 1	染付 小皿	口縁部片, 黒面垂文		近世
	9 - 3 T 1	染付 瓶	口縁部片, 黒面垂文		近世
下新田遺跡 (合2地點)	9 - 4 T 1 土坑 1	かわらけ	底部片, 切り口直		近世
	9 - 5 T 1 土坑 1	染付 瓶	陶器片		近世
	9 - 6 T 1 土坑 1	染付 瓶	陶器片		近世
	9 - 7 T 1 土坑 1	染付 小皿	陶器片		近世
	9 - 8 T 1 土坑 1	寸刀鋸			近世
	11 - 1 T 2 no. 2	土器器 环	黒色土器, 錫製工具で丁寧に研磨される。底部に穿孔・系切痕あり		奈良・平安
	11 - 2 T 2 no. 6	留青器 片	口縁部片		奈良・平安
	11 - 3 T 2	陶器 瓶	口縁部片, 鳥口・美濃		近世
大島地区試掘発生 (合2地點)	16 - 1 no. 12	印旛無葉石器	長さ: 2,05cm, 幅: 1.82, 厚さ: 0.53, 重さ: 1.29, 片脚部欠損		チャート
	16 - 2 no. 20	銅片	長さ: 1,41, 幅: 2.07, 厚さ: 0.51, 重さ: 1.03, 平坦打面をもつ小船形片		チャート
	16 - 3 no. 17	二次加工銅片	銅部片あり		チャート
	16 - 4 no. 15	二次加工銅片	長さ: 1,105, 幅: 2.06, 厚さ: 1.07, 重さ: 3.20, 銅片の右側縁・下端部に連續する片面加工が施される。		チャート, 石臼器か
	16 - 5 no. 26	銅片	長さ: 3,145, 幅: 1.14, 厚さ: 0.45, 重さ: 0.79, 両設打面右側から銅片剥離された薄型の継縫割片, 左上部欠損, ナイフ状石器の基部部分		チャート, 石臼器か
	16 - 6 no. 27	銅片	B.3 - 3,01, 幅: 1.08, 厚さ: 0.33, 重さ: 0.67, 両設打面右側から銅片剥離された薄型の継縫割片, 左面端部右側に取り残されている。両側縁に銅片剥離跡あり		チャート, 石臼器か
	16 - 7 no. 5	深鉢	口縁部片, 幾文L.Rを下から上に施錆後, 左から右へ施文		調文初期
	16 - 8 no. 5	深鉢	銅部片, 多方向から小形L.Rを施錆後, 16-7と同一		調文初期
	16 - 9 no. 5	深鉢	銅部片, 16-7と同一		調文中期
	16 - 10 no. 10	深鉢	地紋に幾文L.Rを施錆後, 沈錆を施す		調文中期
大島地区試掘発生 (合2地點)	16 - 11 no. 2	内口土器	口縁部片		中古世
	16 - 12 T	深鉢	銅部片, 右側面に幾文L.Rを施す		調文後期
	16 - 13 T	陶器器 瓶	銅部片, 瓶口		近世

# 写 真 図 版





1 土木重機による掘削



2 土坑 2 精査後



3 トレンチ 2 精査前(西から)



4 溝 1 遺物出土状況(西から)



5 トレンチ 2 精査後(西から)



6 堆積状況



7 調査完了



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ1 精査前(南から)



4 トレンチ2 精査後(南から)



5 トレンチ2 西面堆積状況



6 調査完了



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ 1 精査前(南から)



4 トレンチ 2 精査後(南から)



5 トレンチ 2 南面堆積状況



6 トレンチ 2 西面堆積状況



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ1 精査前(北から)



4 トレンチ2 深掘部(西面)



5 トレンチ1 精査後(北から)



6 トレンチ1 堆積状況(北面)



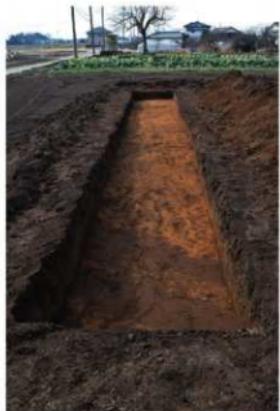
7 調査完了



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 レンチ 精査前(北から)



4 レンチ 遺物出土状況



5 レンチ 精査後(北から)



6 土壌 1 骨出土状況



7 調査完了



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ 精査後[試掘 1]



4 トレンチ 精査後[試掘 2]



5 土木重機による埋め戻し



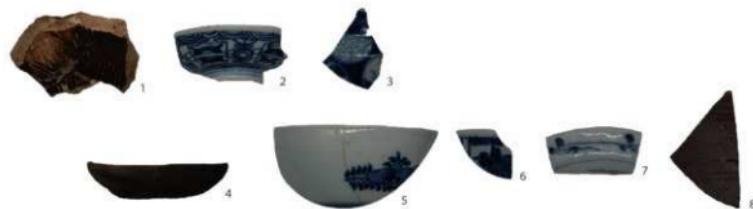
6 調査完了



図版 8



館林城跡・城下町(令 2 地点)



若宮遺跡(令 2 地点)



下新田遺跡(令 2 地点)



大島地区試掘調査(令 2 地点)



# 抄 錄

ふりがな	たてばやしないいせきはつくちょうさほうこくしょ						
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	令和2年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査					卷次	一一
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書					シリーズ番号	第59集
編集者名	宮田 圭祐					編集機関	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 TEL 0276-74-4111 FAX 0276-74-4113						
発行年月日	2022(令和4)年3月1日						
市町コード	102075						
所 収 遺 跡	所 在 地	遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
青柳城跡 (令2地点)	館林市青柳町鹿島道北673-1	0099	36°13'18"	139°31'04"	20200613～20200624	約60m <sup>2</sup>	ガス・電気・水道等(太陽光発電)
船林城跡・城下町 (令2地点)	館林市朝日町1025-2、1028-6	0033	36°05'13"	139°32'15"	20200720～20200721	約22m <sup>2</sup>	集合住宅
若宮遺跡 (令2地点)	館林市若宮町若宮2751-8	0037	36°15'08"	139°32'56"	20201012～20201015	約36m <sup>2</sup>	個人住宅
北近藤第二地点遺跡 (令2地点)	館林市前木町北近藤2578-3 2578-4、2578-5	0092	36°13'51"	139°29'50"	20201211～20201217	約38m <sup>2</sup>	その他建物(特別養護老人ホーム)
下新田遺跡 (令2地点)	館林市赤生田町下新田106-1	0134	36°13'23"	139°34'45"	20201026～20201027	約18m <sup>2</sup>	個人住宅
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
青柳城跡 (令2地点)	城館跡	中世	溝1、土坑3、井戸1		繩文土器片、陶磁器片		
館林城跡・城下町 (令2地点)	城館跡、散布地	縄文、古墳、中世、近世	土坑1、ピット2		陶磁器片、カワラケ片		
若宮遺跡 (令2地点)	散布地	平安	—		土師器片、陶磁器片		
北近藤第二地点遺跡 (令2地点)	散布地	古墳、奈良、平安	—		—		
下新田遺跡 (令2地点)	散布地	平安	土壤1、溝2		石器、繩文土器片、土師器片、陶磁器片		

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第59集

## 館林市内遺跡発掘調査報告書

— 令和2年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

---

編集・発行 館林市教育委員会

〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号 電話0276-72-4111

印 刷 朝日印刷工業株式会社

発行年月日 令和4年3月1日

---